曽野綾子さん死去

93歳 作家「ある神話の背景」

小説「神の汚れた手」やエッセー「老いの才覚」で知られる作家で、文化功労者の曽野綾子（その・あやこ、本名三浦知寿子＝みうら・ちずこ）さんが2月28日午後2時59分、老衰のため、東京都の病院で死去した。93歳。

聖心女子大在学中に参加した同人誌「新思潮」で、後に文化庁長官を務めた作家三浦朱門さんと知り合い、結婚。54年に「遠来の客たち」が芥川賞候補となり、有吉佐和子さんや瀬戸内晴美（寂聴）さんとともに「才女時代」の到来と注目された。

沖縄戦関連の本も複数出版している。1970年には沖縄戦当時の女生徒の動きを追った「生贄の島　沖縄女生徒の記録」、73年には渡嘉敷島の「集団自決」（強制集団死）を題材にした「ある神話の背景―沖縄・渡嘉敷島の集団自決」を発刊した。

「ある神話の背景」では、渡嘉敷島で発生した「集団自決」に軍の命令があったとの証拠はないと主張した。同書は「『集団自決』に軍命はなかった」とする国内の保守層から支持されたが、沖縄戦体験者や研究者からは理論的な欠陥や矛盾が相次いで指摘されている。

渡嘉敷「集団自決」美化

「軍命なかった」と主張

沖縄戦における渡嘉敷島での「集団自決」（強制集団死）について、「軍命はなかった」とした曽野綾子氏の著書や主張は、1970年以降、住民の強制集団死を殉国死として美化する歴史修正主義の「理論的支柱」（石原昌家沖縄国際大名誉教授）として利用されてきた。

日本政府は88年、歴史教科書検定における「集団自決」の記述を巡る家永教科書裁判で、曽野氏を国側（被告）の証人として起用。曽野氏は著書「ある神話の背景」の取材で「自決命令があった証拠はない」と証言した。一方、原告側は、軍による強制、命令、誘導などによって住民が集団死「させられた」と訴えた。

教科書裁判は最高裁（97年）で、「集団自決」の原因に日本軍の存在と誘導があったと認定し、「崇高な犠牲的精神によるものと美化するのは当たらない」として国側の主張を一部退けた。

家永教科書裁判で証言に立った石原氏は曽野氏について「沖縄戦での被害住民を、国のために殉じた尊い死であり、決して軍の命令による死ではないと論陣を張ってきた」と指摘。「日本軍は『軍官民共生共死』の方針により、住民の投降を許さなかった。住民が軍により集団死に追い込まれた真実を直視する必要がある」と語った。2011年に最高裁判決が確定した、作家大江健三郎氏の著書「沖縄ノート」の記述を巡る訴訟では、「集団自決」において「軍命」「軍関与」があったことが認められている。（吉田健一）

沖縄タイムス　2025年（令和7年）　3月5日水曜日

曽野綾子さん死去

93歳 作家・文化功労者

小説「神の汚れた手」やエッセー「老いの才覚」で知られる作家で、文化功労者の曽野綾子（その・あやこ、本名三浦知寿子＝みうら・ちずこ）さんが2月28日午後2時59分、老衰のため、東京都の病院で死去した。93歳。東京都出身。葬儀は近親者で行った。

聖心女子大在学中に参加した同人誌『新思潮』で、後に文化庁長官を務めた作家三浦朱門さんと知り合い、結婚。1954年に「遠来の客たち」が芥川賞候補となり、有吉佐和子さんや瀬戸内晴美（寂聴）さんとともに「才女時代」の到来と注目された。

妊娠中絶の問題を扱った「神の汚れた手」や、大久保清事件をモチーフにした「天上の青」など社会問題を扱った小説のほか、宗教、戦争などに鋭い洞察力を発揮した作品を発表。エッセー「誰のために愛するか」（70年）が200万部を超え、70代後半で発表した「老いの才覚」（2010年）も100万部のベストセラーになった。

敬虔（けいけん）なクリスチャンで知られ、世界の貧困地域への支援など社会活動にも精力的に取り組んだ。保守系論客としても積極的に発言した。

「集団自決」で軍命を疑問視

「ある神話の背景」で

曽野綾子氏は1973年、「ある神話の背景」を出版。渡嘉敷島の「集団自決（強制集団死）」で、「軍命」の存在を疑問視した。

2005年、沖縄戦で座間味島や渡嘉敷島に駐屯していた旧日本軍の元戦隊長とその遺族が、「沖縄ノート」の著者の大江健三郎氏と発行元の岩波書店に出版の差し止めや慰謝料の支払いなどを求めて大阪地裁に提訴した。

原告は主張の根拠に「ある神話の背景」を引用したが、11年最高裁が上告を棄却し、元戦隊長側の敗訴が確定した。

曽野綾子さん死去

作家・93歳「老いの才覚」

「神の汚れた手」「太郎物語」などの小説やエッセー「老いの才覚」の著者で、保守系の論客としても知られた作家で文化功労者の曽野綾子（その・あやこ、本名三浦知寿子〈みうら・ちずこ〉）さんが2月28日、老衰のため東京都内の病院で死去した。93歳だった。葬儀は近親者で営んだ。夫は元文化庁長官で作家の故三浦朱門さん。

東京生まれ。幼稚園から一貫したカトリック教育を受け、17歳で洗礼を受けた。大学時代から同人誌「新思潮」に加わり、1953年に同人の三浦さんと結婚。54年、進駐軍兵士らを若い女性の視点で捉えた「遠来の客たち」が芥川賞候補となった。

建設現場で働く技術者らの姿を追った「無名碑」（69年）や、長男をモデルにした青春小説「太郎物語」（73年）などベストセラーは数多く、小説を通して宗教的な問いや社会問題を追究した。

79年には本紙で「神の汚れた手」を連載、産婦人科医を主人公に妊娠中絶を扱った。80年に女流文学賞に選ばれたが、受賞を辞退した。

エッセーの人気も高く、70年の「誰のために愛するか」は愛や結婚の苦悩をつづってミリオンセラーに。2010年の「老いの才覚」や13年の「人間にとって成熟とは何か」などで、高齢化社会での生き方を描いた。

保守系の論客としても知られ、80年代には子連れ出勤をめぐってアグネス・チャンさんや上野千鶴子さんらと論争した。

97年に吉川英治文化賞。日本船舶振興会（現・日本財団）の会長も務めた。芸術院会員。03年に文化功労者。12年に菊池寛賞。

曽野綾子さん死去

93歳「神の汚れた手」「天上の青」

カトリック信仰を背景に人間の欲望や社会問題への鋭い洞察を込めた小説を執筆し、保守派の論客としても知られた作家、曽野綾子（その・あやこ、本名・三浦知寿子＝みうら・ちずこ）さんが2月28日、老衰のため死去した。93歳。葬儀は近親者で営んだ。

1931年、東京生まれ。聖心女子学院高等科2年時にカトリックの洗礼を受けた。50年、聖心女子大英文科に入学し、文芸誌「新思潮」（第15次）に参加。在学中の53年、同誌同人で当時は日本大芸術学部助教授だった作家の三浦朱門さん（2017年死去）と結婚した。

日本の敗戦直後に進駐軍が接収したホテルでの日本人従業員と米軍人らの日常を描いた「遠来の客たち」を54年に発表。芥川賞候補となって文壇にデビューし、有吉佐和子さんとともに「才女時代」として一世を風靡（ふうび）した。夫の三浦さんらとともに「第三の新人」と呼ばれた。

東南アジアやヨーロッパを旅し、62年には中南米を思わせる架空の独裁国を舞台に革命や移民問題を通じて日本の島国根性を風刺した「リオ・グランデ」を刊行。69年発表の「無名碑」は初めて根底に宗教を据え、家族の喪失や難工事に直面する土木技師を描き切って飛躍を果たした。

「神の汚れた手」（80年）は妊娠中絶や人工授精を題材に生命を見つめ、高い評価を得た。「時の止まった赤ん坊」（84年）はアフリカの修道院付属産院を舞台に貧しさと豊かさを問い、「天上の青」（90年）は殺人鬼を主人公にして、いずれも毎日新聞に連載された。「哀歌」（05年）は日本人修道女を主人公に、アフリカの部族対立と虐殺を描いて人間存在の根源に迫った。他の小説に、家族や教育がテーマの「虚構の家」「太郎物語」など。

エッセーも人気を博し、「誰のために愛するか」（70年）は女性を中心に大ヒットした。「老いの才覚」「人間にとって成熟とは何か」もベストセラーとなった。

カトリック信者として社会活動に積極的で、著作を通じて信仰に尽くした功績で79年、ローマ教皇庁からバチカン有功十字勲章を受けた。95～05年に日本船舶振興会（現・日本財団）の会長を務め、教育や司法などの審議会委員も歴任した。93年日本芸術院会員。03年文化功労者。12年菊池寛賞。

大衆性持つ小説

文芸評論家、富岡幸一郎さんの話　優しい人柄だったが、話しぶりは明晰（めいせき）で筋が通っていた。クリスチャンとして旧約聖書をよく読んでおり、人間の悪や欲望などを捉える明確なまなざしを持っていた。ルワンダやインドなど世界各地に行って直面した現実を大事にして物を書いた。社会・政治問題についてエッセーで鋭く洞察したが、追い詰めるのではなく、問題を他者と共有できるような筆さばきだった。悪や自由を題材にした小説は純文学ながら大衆性を持っている。小説家として再評価されるべきだ。

日本経済新聞　2025年（令和7年）3月5日（水曜日）

曽野綾子さん死去

作家、「神の汚れた手」　93歳

宗教や戦争、社会問題を題材にした小説や老いについてつづったエッセーで知られる作家の曽野綾子（その・あやこ、本名＝三浦知寿子＝みうら・ちずこ）さんが2月28日午後2時59分、老衰のため、東京都の病院で死去した。93歳だった。葬儀は近親者で行った。

大学生の時に作家の三浦朱門さんと知り合い、結婚。「神の汚れた手」など社会問題を扱った小説を発表した。エッセー「誰のために愛するか」「老いの才覚」はベストセラーになった。

日本船舶振興会（現日本財団）会長などを歴任。社会活動にも精力的に取り組んだ。日本芸術院会員。文化功労者。

曽野綾子さん死去

93歳 「神の汚れた手」

小説「神の汚れた手」やエッセー「老いの才覚」で知られる作家で、文化功労者の曽野綾子（その・あやこ、本名三浦知寿子＝みうら・ちずこ）さんが2月28日、老衰のため死去した。93歳。東京都出身。葬儀は近親者で行った。

聖心女子大在学中に参加した同人誌「新思潮」で、後に文化庁長官を務めた作家三浦朱門さんと知り合い、結婚。54年に「遠来の客たち」が芥川賞候補となり、有吉佐和子さんや瀬戸内晴美（寂聴）さんとともに「才女時代」の到来と注目された。

妊娠中絶の問題を扱った「神の汚れた手」や、大久保清事件をモチーフにした「天上の青」など社会問題を扱った小説のほか、宗教、戦争などに鋭い洞察力を発揮した作品を発表。エッセー「誰のために愛するか」（70年）が200万部を超え、70代後半で発表した「老いの才覚」（2010年）も100万部のベストセラーになった。

1995年から日本船舶振興会（現日本財団）会長を約10年間務めた。敬虔（けいけん）なクリスチャンで知られ、世界の貧困地域への支援など社会活動にも精力的に取り組んだ。79年にはローマ教皇からバチカン有功十字勲章を受章。保守系論客としても積極的に発言した。

日本芸術院会員。97年に海外邦人宣教者活動援助後援会の代表として、吉川英治文化賞を受賞した。他の著作に「太郎物語」やエッセー「人間にとって成熟とは何か」など。おしどり夫婦として知られた三浦さんとの共著も多い。

◇

曽野綾子さんは1968年7月～69年12月、本紙夕刊にコラム「放射線」を連載した。

曽野綾子さん死去

93歳 「神の汚れた手」「老いの才覚」

小説「神の汚れた手」やエッセー「老いの才覚」で知られる作家で、文化功労者の曽野綾子（その・あやこ、本名三浦知寿子＝みうら・ちずこ）さんが2月28日午後2時59分、老衰のため、東京都の病院で死去した。93歳。東京都出身。葬儀は近親者で行った。【関連記事25面に】

聖心女子大在学中に参加した同人誌「新思潮」で、後に文化庁長官を務めた作家三浦朱門さんと知り合い、結婚。54年に「遠来の客たち」が芥川賞候補となり、有吉佐和子さんや瀬戸内晴美（寂聴）さんとともに「才女時代」の到来と注目された。

妊娠中絶の問題を扱った「神の汚れた手」や、大久保清事件をモチーフにした「天上の青」など社会問題を扱った小説のほか、宗教、戦争などに鋭い洞察力を発揮した作品を発表。エッセー「誰のために愛するか」（70年）が200万部を超え、70代後半で発表した「老いの才覚」（2010年）も100万部のベストセラーになった。

1995年から日本船舶振興会（現日本財団）会長を約10年間務めた。敬虔なクリスチャンで知られ、世界の貧困地域への支援など社会活動にも精力的に取り組んだ。79年にはローマ教皇からバチカン有功十字勲章を受章。保守系論客としても積極的に発言した。

日本芸術院会員。97年に海外邦人宣教者活動援助後援会の代表として、吉川英治文化賞を受賞した。他の著作に「太郎物語」やエッセー「人間にとって成熟とは何か」など。おしどり夫婦として知られた三浦さんとの共著も多い。

曽野さん 閣僚参拝「違憲」

中曽根内閣時代の靖国懇で主張

本紙公開請求の議事録に

2月28日に死去した作家の曽野綾子さんは、中曽根康弘内閣時代の1984年から85年にかけ、政府が開いた「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇談会」（靖国懇）で、閣僚の公的参拝は「違憲と考える」と主張、保守論者とされる作家の意外な一面を見せた。信濃毎日新聞が2019年に情報公開請求し、初めて開示された議事録で分かった。【27面参照】

靖国懇は曽野さんのほか駒ケ根市出身の憲法学者、芦部信喜さんら各界を代表する計15人が委員になり、戦後初めて首相らの靖国神社公式参拝の是非を議論した。

曽野さんは85年2月の第7回会合で、「私は全く法律知識を持たない一人のおかみさんでございます。また一キリスト者でございます」と前置きし、憲法20条の政教分離原則を念頭に違憲論を展開。▽靖国神社が昭和27（1952）年に宗教法人として自ら申請した責任がある▽神道による神社の形式を取っているのだから、明らかに特定の宗教を持つ神社▽宗教色はなく、ただ伝統行事を行う、慰霊を行う場所だということには無理がある―などと述べた。

その上で「全く宗教と関係のない記念廟（びょう）の設立」を提案。「そのときに、はっきりと総理並びに閣僚、公務員の公式参拝が実現できる」とした。

議事録の開示後、本紙は曽野さんにインタビューを申し込んだが「大切なことなので簡単に答えられない」などと断られた。第7回会合の議事録は本紙連載をまとめた本「芦部信喜　平和への憲法学」（岩波書店）に収められている。

（編集委員　渡辺秀樹）